

第五章 閻司祭暴走

マリナ 「……ん？ あれ、私……」

閻司祭 「ようやく起きたわね。待ちくたびれたわ」

マリナ 「……妹は？」

閻司祭 「まだ実験が終わっていないわ。あなた、素晴らしい被検体だから色々と試したいのよ」

【マリナ、身構える】

マリナ 「そんな言葉、信じられると思つてるの？ これが終われば解放するつて、何度も言われても解放されないじやない！」

閻司祭 「あら怖い。 いまから行う実験は、あなたも楽しめると思うんだけど」

マリナ 「私が楽しめる実験なんて、あるわけないでしょ！ 寝言は寝て言いなさいよ！」

閻司祭 「そう怒らないの。実験つて言つても、あなたに快樂を与えるんじゃないのよ？」

マリナ 「……快樂以外のなにかを与えるつてこと？」

闇司祭 「違うわ。あなたが私に快樂を与えるの」

マリナ 「私が、あなたに……？ 意味のわからないことを言わないで！」

闇司祭 「言つた通りなのだけれど……困ったわね、信頼を失つてるわ」

マリナ 「自分たちで失うような真似をしたからでしょ！」

マリナ （なにを考えているの？ この司祭は）

闇司祭 「とにかく、あなたは私に従うしかないのだから、私に快樂を与えなさい。ほら、どこから来てもいいわよ」

マリナ 「……医者とナースは？ あのふたりが隠れてて、途中から襲つてくるとかないわよね？」

闇司祭 「ないわ。あのふたりにも言つていかない実験だもの」

マリナ （とりあえず、言うことを聞いたほうがいいのかしら）

マリナ 「……わかつたわ。やればいいのね」

闇司祭「そう。あ、ひとつ条件を出すわ。私に毒液を注入すること。これさえ守ってくれれば、なにをしてもいいわ」

マリナ（あの薬を自分に注入させるの……？ やっぱり正気じやないわ。完全に狂人の考えよ）

マリナ「……の器具で、いいのよね？」

闇司祭「ええ。中身は充填済みだから、好きなだけ使いなさい。できるだけ多く注入してくれたほうがいいわ」

マリナ（なんだかあとが怖いけど、やるなら徹底的にやるしかないわ。この薬の効き目は、散々注入された私がよく知ってるんだから）

マリナ「……じゃあ、始めるわ」

闇司祭「お願い。たんまり注ぐのよ。躊躇いはいらないわ」

マリナ（……やるのよ。こいつの身体が壊れたって知らないし、そうすれば妹と一緒に逃げられるかもしれないし……）

闇司祭「んつ……チンポにセットされちゃった。もう少し奥まで、注入口をねじ込んで」

マリナ 「こ、こうでいいの？」

闇司祭 「あああんっつ！ そうよ、それくらい強引にねじ込んでから、ぶちゅううう～って注入するの」

マリナ 「……注入、するわ」

闇司祭 「んんっ♪ 来てる来てる♪ 尿道の中を、毒液が通っていくわ♪」

マリナ 「これで喜ぶなんて……」

闇司祭 「あら、引かないでもらえるかしら？ この毒液は精力剤と媚薬を兼ねたものなんだから、喜んで当然なのよ？」

マリナ 「……確かに、立場が違えば喜んでもおかしくないわね」

マリナ（だけど、この薬は身体をおかしくする力のほうが強いわ。こいつだつて、いまは余裕でもたくさん注いでいけば、いずれ私みたいになるに違いない。そこまでやるのよ。この狂人が、ひいひい泣いて、もう許してって言い出すまで責め尽くしてやるわ）

マリナ 「溢れできちゃったわね。とりあえず、ここまでかしら」

闇司祭 「もっと入れてもいいのだけれど？」

マリナ「だつたら、願い通りにしてあげる！もつと注入器を奥まで突っ込んで……ほら、欲しかったお薬よ！この無駄に大きいおちんちんで、ゴクゴク飲み込みなさい！」

闇司祭「あああんっ！ああああっ！んあああんっ！チンポが火傷しそうなほど熱い……っ！毒液、もつとお……もつと注いでえ……！」

マリナ「思つてたよりも、ずっとずっと欲しがりなおちんちんなのね。SはMでもあるつて言うけど、あなたの場合、それが当てはまつてゐみたい。ほらほら、膀胱が悲鳴をあげるまで注いであげるわ！」

闇司祭「んんんっ♪無理やり注がれちゃつてるわ♪膀胱が悲鳴をあげるまで、なんて……やられた分は、きつちりやり返すつもりなのね……いいわ、見込んだ通りよ。いっぱい注いで、いっぱい気持ちよくして、あなたが言つた通りの欲しがりチンポを射精させてっ♪」

マリナ「ドが付く変態ね、あなた……いいわ、もつと注いであげる！」

闇司祭「あああんっ♪チンポ、注がれ過ぎておかしくなっちゃう……っ♪」

マリナ「本当に、どれだけ注いでも喜ぶのね。驚きだわ。おちんちんは、とつくに泣き出しているのに」

闇司祭「だつてえ、気持ちいいんだもの♪ あなたは無理に我慢したから、この気持ちよさがわからなかつたのよ」

マリナ「わかりたくもないわ……でも、あなたは喜ぶ人間みたいだから、身体がついていけないぐらいたつぶり射精できるようにしてあげる！」

闇司祭「あんっ……！ 引き抜くのも強引……♪ でも、そうでなくてはね。せつかく、あなたに責めさせている意味がないわ」

【マリナ、闇司祭の股間に移動】

マリナ「さあ、覚悟しなさい。あなたがしたように、お口でこのおちんちんを躊躇かるから」

闇司祭「躊躇だなんて……♪ 期待に胸が高鳴っちゃうわ♪」

マリナ「マゾ司祭め……一切手を抜くつもりはないから、三二三すり半で射精しないようにしなさい。もしそんな早く出ちやうようなら、十回でも二十回でも射精させるから」

闇司祭「怖いわ。でも、楽しみ♪」

マリナ「へらず口だこと！ サッさと咥えちやつたほうがいいわね……ああむつ、んじゅるつ、じゅるるるつ、ぢるるるつ、じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶつ……じゅぶぶぶ

ぶうつ！」

闇司祭「あつ、んつ、ああつ、はあんつ……！ 最初から、激しい……つ！ 宣言通りね……私のチンポを、お口で攻撃してるわ……毒液でビンビンのチンポ、あなたのお口と唾液で犯されてる……つ！」

マリナ「じゅぐりゅつ、ふじゅぐつ、んじゅるつ、れるつ、れるれるつ、れろろろつ、んじゅつ、じゅるるつ……！」

闇司祭「ひあああんつ、んあんつ、ああんつ、ああああつ、んんつ、ああああつ……！ 私との会話を、楽しむつもりは……んつ、あああつ、んつ……ないのね……んくつ、くふつ、くはつ……一心不乱に……チンポの虜になつたみたいに……あくつ、あつ、んんつ！ ジュ。ポジュ。ポしちやつてる……つ」

マリナ「んじゅるつ……あなたとの、じゅるつ、れるじゅつ、会話を楽しむ義務なんて……あむつ、はむあむつ、むぢゅりゅつ……ないでしょお……れるつ、じゅるるるつ、れるじゅつ、むじゅつ……！」

闇司祭「ないけれど……はあんつ、はつ、んつ、は、はつふ……！ せつかく咥えてくれてるんだから……あつ、んいつ、いああつ……！ 楽しもうとしたつていいじやない……つ」

マリナ「黙りなさい……じゅるつ、れるるるつ、れろれろつ、んれろつ……へらず口が過

ぎたら……ちゅつ、ちゅずつ……じゅろじゅろつ……このおちんちん、歯で噛み切るわよ
……ぢゅろぢゅろぢゅろつ！」

闇司祭「ひうつ、はあつ……噛み切られちやうのは困るわ……私だつて、チンポは……
んんんつ！ そこそこつ！ 喉奥で、亀頭を締め付けてえ……♪ デイープスロートお……
…喉でいじめてほしいのお……♪」

マリナ「とんだおねだりおちんちんだわ……じゅるつ、じゅろろろろつ……この状況でおね
だりしてくるなんて……だけど……れるじゅつ、ぢゅろろろろろつ……そのおねだりには応
えてあげない……代わりに……んぶああつ……はあは……あなたがフェラよりも欲し
がつてる、このお薬を注入してあげるわ……ほら、追加分よ！ 奥までねじ込んで、たつ
ぶり注いであげるつ！」

闇司祭「んおおおおつ！ おおおつ！ おおおんつ！ チンポお……フェラでビクビク
してた敏感チンポにい、ドクドク注がれちゃつてるう……！」

マリナ「溢れてきたけど、どうせもつと欲しいんでしょ！」

闇司祭「ひぐうつ！ それ以上は、注入器がチンポに入らない……つ！」

マリナ「入らなくとも、押し潰されてるが好きなんでしょ！」

闇司祭「あああんつ♪ そうよお♪ チンポが気持ちよくて、もっと刺激してえ♪ つて

身体がおねだりしちゃつてるのぉ♪」

マリナ「だつたら、この状態でえ……れるつ、れろれろつ、れろおおおつ！」

闇司祭「あああああああ！ 注入してる最中に、ペロペロ舐めちやダメえ……♪」

マリナ「ダメって割には、おちんちんが喜んでるわよ！ れろれろつ、れろつ、んれ
ろおおつ、れろつ、んちゅつ、ちゅつ、ぴちやぴちや、れろろろつ、れろれろつ、んれ
るうつ……！」

闇司祭「は、んつ、あつ、ああああつ！ チンポ、ビクビクしたいのに、奥まで注入器が
あってビクビクできない……つ！」

マリナ「ビクビクしたいなら……んれろつ、れろろろろつ、注入器を抜いてくださいって
お願ひしなさい！」

闇司祭「しますう……おねだりしますう……私のチンポに入っている注入器を……んおつ、
おおおおつ、ほおおおんつ……！」

マリナ「れろれろれろれろつ！ 注入器を、どうして欲しいのかしら……れろろろろろ
ろつ、れろ、れろつ、れろろろろろつ！」

闇司祭「注入器を、抜いてくだひやい……チンポを自由にさせてくだひやい……ビクビク

できなくて、つらいんですう……」

マリナ「よくおねだりできたわね……ふふふ、お望み通りに抜いてあげるわ……それっ！」

闇司祭「ああああああんっ！　あっ！　んっ！　ふああっ！　ひああああっ！」

マリナ「引き抜いただけで、射精してるみたいに跳ねてるわね。腰も浮いて、ブリッジみたいになつて……射精しないのが奇跡って思うくらいよ……ふふふ」

闇司祭「こんなに……んつ、気持ちいい」としてるので……あつ……すぐに射精したらもつたいないわ……んふう、ふう……たっぷり我慢して、気持ちいい射精をしたいのぉ……はははあ……」

マリナ（いい感じに壊れてきたわね。でも、まだよ。私はもっとメチャクチャにされたんだから）

マリナ「……あれえ？　おちんちん、精液をおもらししてるじやない。確か副作用だったわね。注ぎ過ぎて、早めに出ちゃったのかしら」

闇司祭「これが副作用……ああああつ……もつと責めてえ……あなたにしたみたいに、いっぽいいじめてえ……♪」

マリナ 「言われなくても、やつてやるわよ！」

マリナ（医者とナースが来る気配はないわね。これなら、司祭をいじめることに集中できそう）

マリナ「欲しがりおちんちん、また咥えてあげるわ。お薬をたんまり入れてるから、出ないよう気に付けなさい……はあむつ、ぢゅりゅぢゅずつ、ぢるるるつ、じゅろじゅろつ、はむじゅつ、んじゅるつ、あむあむあむあむつ……！」

闇司祭「ひぐつ、あつ、あ、ひんぐうつ……！ チンポ、さつきより敏感になつてえ……ああああつ……！ らめえ……いつちやいそうう……！」

マリナ「我慢……れるじゅつ、するんじやなかつたの……はぶじゅつ、ずじゅずじゅつ……欲しがりな上に、我慢もできないダメダメおちんちんだつたのかしら……ぢじゅるつ、じゅぶりゅつ、じゅぼじゅぼじゅぼつ！」

闇司祭「我慢、しますう……んおつ、おおおつ……もっとお、チンポかわいがつてもられるようにい……がまんう、しまひゅう……あつ、んんつ、はあつ、んくつ……！」

マリナ「なにがあつても……ぢぶりゅりゅつ、じゅるぶつ、我慢できるのかしら……はぶじゅつ、じゅぐりゅつ、じゅろろろつ……！」

闇司祭「なにがあつても……ひいひい……がまんう、しまひゅう……！」

マリナ 「そういうことならあ……んぶああつ……またお薬を注入してあげるわ！」
ほ
らう！」

闇司祭 「んぎいいいいいい！ さつき注いだばかりい……！」

マリナ 「ドクドクいくわよ！」

闇司祭 「あああああああああつ！ らめえ……まだ、毒液がたっぷり、残つて……ふうふう
ふうふうつ……！」

マリナ 「なにがあつても我慢つて言つたわよね！」

闇司祭 「でもお、これはお薬だからあ……はあ、んんつ、ああああつ、あああんつ！」

マリナ 「んふふつ、今度は注入器が刺さつててもおかしましにビクビクしてゐね。間か
ら精液が漏れて……じゅるるるう、れろつ、ド変態なおちんちんになつてるわよ……れ
ろつ、んれろつ」

闇司祭 「らめえ……出ちやうう……お薬入れられて、出ちやううう……！ いま以上、入
れられたらあ……はあはあ……おかしく、なつちやう……もう、あなたに入れたのと同じ
くらい入つてるからあ……はあはあはあつ……！」

マリナ 「そ、う……じやあ、一旦抜こうかしら」

闇司祭 「ひぐつ……！ んくつ！ んんんつ！ あああう！ 出るつ、出るつ……！
らめえ……我慢なお……ほおほお……！」

マリナ 「また耐えた……んふふつ、さすがはこのお薬を作った張本人ね。耐性が違うわ。
でも……あむつ、ぢるるるつ、ぢぶりゅりゅつ……！ この状態でフェラしたら、どこま
でもつかしらね……んじゅるつ、じゅるるるつ、れるじゅつ……！」

闇司祭 「ひいつ、ああああつ、んおつ、おおおんつ……容赦ないい……チンポ、メチャク
チヤになつてるのにい……！」

マリナ 「びじゅぐりゅつ、んぶつ、んぶつ、じゅるつ、れるじゅつ……そうね、注入器を
入れ過ぎて尿道口がパツクリ開いちやつてるし、お口の中でもビクビク跳ねまくりだし、
オマケに……じゅるるるるつ！」

闇司祭 「ひぎいいつ！」

マリナ 「この我慢汁と、おもらし精液。とても、まともな状態のおちんちんじゃないわ」

マリナ （最高。この司祭がよがつてゐるだけで、いくらでもフェラできるわ。頸の疲れなん
て全然感じない。責め抜いて、私と同じく廢人みたいにしてやるわ！）

マリナ 「ち。ぶりゅりゅつ！ じゅるるつ！ れるじゅぐつ！ むじゅぐつ！」

闇司祭 「んい いっ……締め付けがあ、強くなつてえ……つ！」

マリナ 「じゅりゅぐつ！ ぐじゅりゅつ！ ぢゅろぢゅろぢゅろつ！ それだけかしら：…？」

闇司祭 「ジ ュ ポジ ュ ポ も、激しいい……」

マリナ 「そうでしょお……じゅりゅつ！ んじゅるるつ！ 感じてることは、ちゃんと言
いなさいって私に何度も言つたじやない……じゅるぶつ、じゅるるつ、むじゅるつつ！」

闇司祭 「でも……あう、んんんつ……出ちやいそ、だからあ……はあ、はあ、はあ…
…」

マリナ 「あなたでも……ぢるるるつ、んじゅるつ……出そうだと素直になりきれないのね
……あむあむあむつ……意外だわ……ぢるるつ、知りたくもなかつたけど……はああ
むつ、じゅるるるるつ！」

闇司祭 「ひいひいひいひいつ……イカ、せてえ……射精、させてえ……チンポ、限界い
……はあ、ふう、はあ……」

マリナ 「耐えるつて言つてたのに、やつぱりダメなの……？」

闇司祭 「無理い……毒液、注入され過ぎたからあ……」

マリナ 「そう、だつたら……んふあつ……最後にもつと注入してあげるわ！」

闇司祭 「あぐつつつ！ また注入器があ……！」

マリナ 「最後だから、たっぷり入れるわよ！」

闇司祭 「んんぐうううつ……！ あああああああああつ……！」

マリナ 「ほらほらほらっ！ 膀胱が破裂したって、注入し続けるわよ！」

闇司祭 「イクつ……ああああつ！ オ薬注入されたまま、イッちやうう……！」

マリナ 「この状態で射精しても、つらいだけじゃないの？ せめて、注入器を引き抜いてから射精したら？」

闇司祭 「早く抜いてえ……じやないと、このままイッちやう……！ チンポ、イッちやうのお……！」

マリナ 「それもおもしろいから、このまま注ぎ続けることにするわ」

闇司祭「んぎいいつ……そこまでは、してないのにい……射精のときはあ、注入してなかつたのにい……ひい、ひい……」

マリナ「やられた分以上にやり返してなにが悪いの？ そもそも、これはあなたが言い出したことよ？ 好きなだけ、お薬を使つていいとも言つたわ」

闇司祭「だけ、どお……あつ、あ、んあつ、あくあつ……！ イクつ、らめえ、イクイクつ！ 抜いてえ、抜いてえ……じやない、とお……お薬、多過ぎてえ……はあ、はあ、はあ、はあ……」

マリナ「ふふふつ、だらんとしちやつたわね。さすがのあなたでも、この量は許容範囲外だつたつてことかしら。でも、おちんちんだけはバキバキでビクビクして……引き抜いたら、その刺激で射精しそう」

闇司祭「はあ、はあ、はあ、はあ……んんう……らめえ……らめえ……はあ、はあ、はあ……」

マリナ「白目剥きそうね。じやあ、本当に最後……この注入器で、尿道を愛撫してあげる！ ほらほらほらほらっ！」

闇司祭「んい……ああ……出るう……ああ……ああああ……ふああああ……」

マリナ「激しく動かしてるので、喘ぎ声すら満足に出せなくなってるのね。いい気味だ

わ」

闇司祭 「はあ、 でるう……でるうう……でるうううう……」

マリナ 「出しなさい。注入器を抜いてあげるから」

闇司祭 「でるう、 でるうううう……せーえきい、 でるうううう……」

マリナ 「抜くわよ……そおれつ！」

闇司祭 「んぐっつっつ……！ あああああつ！ 出て……んんんつ！」

マリナ 「すつ……おちんちんだけ別の生き物みたいに跳ね回って……んつ！ こつ
ちにもかかつてきたわ……射精しても、私に迷惑をかけるおちんちんなのね」

闇司祭 「ああああつ、 んんんうつ……はあ、 はあ……射精、 気持ちいい……ああ、 ん
あああああつ、 はああああつ……」

マリナ 「そうでしようね。これだけ出して、気持ちよくない人なんていないわ。しかも、
このお薬の効き目は私も知ってる。あなたがいま、どういう状態になつてるかも、手に取
るようにわかるわ。身体の力が全部抜かれて、おちんちんだけ異常に元気で、意識が遠の
きそなんでしょう？」

闇司祭 「気持ちいい……射精い……気持ちいい……はあ、はあ、はあ、はあ……」

マリナ 「まるで聞いてないわね。全部、うわ言だわ」

マリナ（私もこうだった。それで、意識が普ツツリ切れた）

マリナ 「そうだ。射精できた記念に、またお薬を注入してあげるわ。これ、精力回復の効果もあるんでしょ？ だったら、いまのあなたにはピッタリなお薬よね？」

闇司祭 「あう……ふう……んんう……あああ……」

マリナ 「聞こえでない。一応了解は取つたし、注入しちやお……それ、ぶちゅう！」

闇司祭 「あああああああああああっ！ チンポお……チンポお……ああああああああっ：…チンポお……ほお、ほお……あぐつ……」

マリナ「あら、動かなくなつちやつた。さすがにやりすぎたつたみたいね。でも、ちようどいいはずよ。私だつて、意識がなくなるまでお薬入れられて、何度も射精させられたんだから」

【マリナ、注入器を捨てる】

マリナ「動かないなら、いまのうちよ。妹を助けて、あのふたりの目を盗んで、ここから

• • • •

マリナ 〔なに……?〕

闇言祭
んふふ
んふふふふふふ♪
すこく気持せよかたれあ♪

【闇言祭 立ち止かる】

闇司祭 「あなたを見込んで頼んだ甲斐があつたわ♪」

マリナ（なんだか、雰囲気が……なに？）
快楽責めにする前よりも不気味になつてゐるんだ
けど……）

闇司祭「やつぱり、驚いてるわね」

マリナ「いまのは、全部演技だつたつて言うの……？」

闇司祭「いやねえ、違うわよお♪ いまのは、せーんぶ本当の反応よ。あなたに毒液を注がれまくつて、抵抗すらできなくなつて、惨めに射精させられちやつたの」

マリナ「だ、だったら、その余裕は……」

闇司祭 「これこそが、あなたに快楽責めを頼んだ理由よ。この毒液はねえ、一定量を超えて投与されて、効き目が強く出るとね、精力回復と媚薬の効果以外に、暴走状態になるの……こうしてねえ……」

マリナ 「いやつ、待って、近づかないでっ！」

闇司祭 「なに？ キスぐらいさせてくれてもいいじゃない。今まで散々、チンポをいじめ合った仲なんだから……あむつ、んちゅつ、ちゅつ、ちゅうう、んちゅつ、ちゅつ……」

マリナ 「はふつ、んふつ、んぶぶつ……！」

闇司祭 「お口を閉じちゃ嫌よ？ キスなんだから、熱く、甘く、刺激的に……ほら、お口を開けなさい……んちゅつ、れるつ、れろれろつ、ちゅつ、ちゅううつ……」

マリナ 「んぶつ！ んぶぶぶつ！ んあつ……んちゅつ、ちゅつ……れろろろつ……んんつ！」

マリナ（暴走つてなによ。こんな効果が残されてたの？ 私、墓穴を掘つただけじやない……！）

闇司祭 「ふああつ♪ んふふつ、いいキスだったわ。積極的にお口を開けて、舌を絡めて

くれたらもつとよかつたけれど
「